

タイトル：研究と実践を結ぶための 3 つの視点 — ISLA 研究の知見と新しい方向性 —

講演者：鈴木 祐一（早稲田大学）

概要

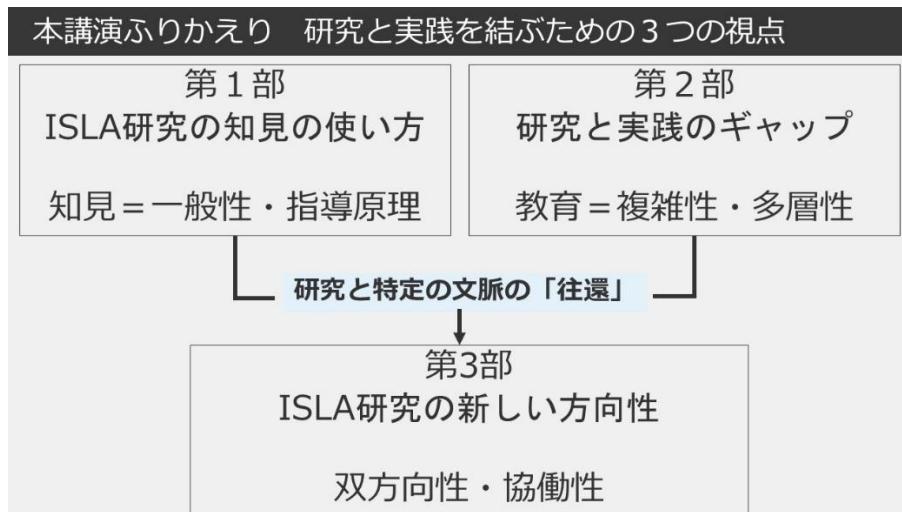
第二言語習得(SLA)研究の中でも、特に指導が習得に与える影響を探る ISLA(Instructed SLA)研究は、外国語教育の改善という目標を掲げ、理論と実践の架け橋となることが期待されてきました。しかし、近年の研究の専門化・細分化は、かえって研究と教育現場の溝を深めているという指摘も少なくありません。

本講演では、まず鈴木(2024)に基づき、ISLA 研究がこれまで明らかにしてきた、認知・社会・情意面に関する外国語習得プロセスおよび外国語指導法に関する重要な知見を概観します。その上で、研究と実践の間に横たわるギャップの構造を歴史的に紐解き、なぜその溝が埋まらないのか、その要因を考察します。最後に、このギャップを乗り越え、研究知見を日本の英語教育という豊かな文脈の中で活用するための ISLA 研究における新たな取り組みの方向性を示し、会場の皆さんと共に議論を深めたいと思います。

本講演のねらい：次のような疑問や悩みやお持ちの先生方に

- 自分の研究の意義についてふと疑問に思ったことがある方
- 外国語教育研究と実践の関わりについて本気で考えたい方
- 第二言語習得(SLA)などの研究知見を、どう外国語教師に伝えればいいか知りたい方
- 実践に資するような SLA 研究を計画したい方

1. 本講演の全体像(Conceptual Map)



2. 本講演の主な主張 (Key Takeaways)

研究と実践を結ぶために、以下の3つの視点を提案しました。

【視点1】ISLA研究の知見の使い方(研究 = 一般性)

研究知見は、日々の実践の「思い込み・当たり前」を問い直し、新しい考え方につづいたり、授業改善に活用できる。

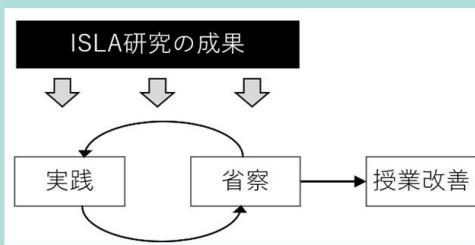
ISLA知見を使うための指導原則の捉え方

- 学習者の習得プロセスや発達段階の見方を得る
- 指導の優先順位をつける
- 現実的な指導目標を設定する
- 授業設計の指針を与える

第1部まとめ ISLA研究の知見はどう役立つか？

ISLA研究の成果を活用しながら「振り返る」ことができる

1. 指導の「思い込み」に気づき、新しい考え方を得る
2. 授業改善を後押し
3. 教師の専門性を高める



【視点2】研究と実践のギャップの捉え方(実践 = 複雑性・多層性)

ギャップは単なる問題ではなく、両者の「性質の違い」に起因します。

- 研究の性質:変数を統制し、普遍的な真理(一般性)を追求する。
- 実践の性質:教室という多様な要因が絡み合う「複雑系」の中で、文脈依存的(ローカル)な最適解を求める。
- 歴史的背景:SLA研究は「社会的転回(Social Turn)」による多様化と、「方法論的転回(Methodological Turn)」による厳密化を経ており、これが現場との距離を生む一因ともなっている。

第2部まとめ なぜ研究と実践にはギャップが起こるのか？

「あたらしい」第二言語習得研究の展開

言語教育・習得は複雑で多層性の中に埋め込まれた営みである。

- 多様なSLA理論・認識論が示す**「複雑性・多層性」**は、「専門知識→実践」のように直接的な応用は難しいことを示す。
- 「認知的アプローチの研究」から導きだそうろする**「普遍性」**は、単純にあらゆる社会教育環境に当てはめられるとは限らない。
- 「答えが一つではない」複雑な現実を、**複眼的に捉えて**対応するのが、研究者と実践者の共通の仕事
→教師と研究者の協力的な関係を築くことが大切

【視点3】新しい方向性(ローカルな文脈と研究を結ぶ = 双方向性・協働性)

一方的な「研究→実践」の適用ではなく、双方向のアプローチが必要です。

- 実践者研究 (Practitioner Research):日々の実践の中に問い合わせを見つけ、検証する姿勢を持つこと。
- Researcher-as-Teacher:研究者が自身の教育現場を持つ強み(文脈理解)を活かすこと。
- 協働と一般化:特定の学校での長期的な実践研究(Multi-site study など)を通じて、文脈を保持したまま知見の一般化を目指す研究方法

第3部まとめ 研究と実践を繋ぐためにできることは？

研究と実践の接点を積極的に作り出し、
「研究↔実践」の双方向的・循環的な関係を築く努力を続ける

1. 研究者と実践者がコミュニケーションする
2. 実践者の問い合わせに応じた研究を行う
3. 実践を理解する（現状把握）
4. 実践者と研究する
5. 「実践者－研究者」が研究する

【まとめ】研究と実践を結ぶための3つの視点

研究と実践を結ぶための3つの視点

1. ISLA研究の知見の使い方

指導の「思い込み」に気づき、新しい考え方を得て、実践を振り返り、授業改善しながら、専門性を高める

2. 研究と実践のギャップの捉え方

複雑かつ多層にも埋め込まれた言語教育・学習に、シンプルな答えなど一つもない。教師と研究者の対話が不可欠。

3. ISLA研究の新しい方向性

「研究↔実践」の双方向的な関係を築くために、研究者側が取り組める方法がいくつもある。

3. 参考文献リスト (References)

本講演で言及・引用した主な文献の一覧です。

■第1部 ISLA 研究

- 鈴木 祐一 (2024). 『あたらしい第二言語習得論—英語指導の思い込みを変える』 研究社.
- Loewen, S. (2020). *Introduction to instructed second language acquisition* (2nd ed.). Routledge.
- Sato, M. (to appear in 2025). Instructed second language acquisition: Inclusivity and equity for the common goal.

■第2部 SLA 研究の歴史・理論・メタ理論

- Block, D. (2003). The social turn in second language acquisition. Edinburgh University Press.
- Ellis, R. (1997/2008). The study of second language acquisition. Oxford University Press.
- Firth, A., & Wagner, J. (1997). On discourse, communication, and (some) fundamental concepts in SLA research. *Modern Language Journal*, 81, 285-300. <https://doi.org/10.2307/329302>
- Lantolf, J. P. (1996). SLA theory building: "Letting all the flowers bloom!". *Language Learning*, 46(4), 713-749.
- Larsen-Freeman, D., & Cameron, L. (2008). *Complex systems and applied linguistics*. Oxford University Press.
- The Douglas Fir, G. (2016). A transdisciplinary framework for SLA in a multilingual world. *The Modern Language Journal*, 100(S1), 19-47. [https://doi.org/https://doi.org/10.1111/modl.12301](https://doi.org/10.1111/modl.12301)

■ スキル習得理論レビュー

DeKeyser, R. M. (2007). *Practice in a second language: Perspectives from applied linguistics and cognitive psychology*. Cambridge University Press.

Suzuki, Y., Nakata, T., & DeKeyser, R. M. (2019). Optimizing second language practice in the classroom: Perspectives from cognitive psychology. *The Modern Language Journal*, 103, 551-561.

以下、HP よりダウンロード可能です。

<https://yuichisuzuki.net/research/>

- DeKeyser, R. M., & Suzuki, Y. (2025). Skill acquisition theory. In B. VanPatten, G. D. Keating, & S. Wulff (Eds.), *Theories in second language acquisition: An introduction* (4th ed., pp. 157-182). Routledge.
- Suzuki, Y. (2022). Automatization and practice. In A. Godfroid & H. Hopp (Eds.), *The Routledge Handbook of Second Language Acquisition and Psycholinguistics* (pp. 308-321). New York: Routledge.
- Suzuki, Y. (2024). Skill acquisition theory: Learning-to-use and usage-for-learning in SLA. In K. McManus (Ed.), *Usage in second language acquisition: Critical reflections and future directions* (pp. 147-168). New York: Routledge.

■ 研究と実践のギャップ・協働

鈴木 祐一 (2024). 『あたらしい第二言語習得論—英語指導の思い込みを変える』研究社.

補章「研究と実践の対話」のダウンロードリンク

https://www.kenkyusha.co.jp/lp/instructed_sla

- ・ 村野井仁 (2006). 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店.
- ・ 鈴木渉(編)(2017) 『実践例で学ぶ第二言語習得研究に基づく英語指導』大修館書店
- ・ 中田達也 (2019). 『英単語学習の科学』研究社.
- ・ 門田修平・高瀬敦子・川崎眞理子 (2021). 『英語リーディングの認知科学: 文字学習と多読の効果をさぐる』 くろしお出版
- ・ 濱田陽 (2024). 『よくわかる英語シャドーイング: 実践から指導まで』 くろしお出版
- ・ 神谷信廣 (2025). 『英語授業で学習者の誤りにどう対応するか: フィードバック研究の観点から』 大修館書店.
- ・ オンライン note マガジン: 「忙しい教師のための『あたらしい第二言語習得論』のエッセンス」
https://note.com/honest_hyena9342/m/m9a11ec4ceed7
- ・ Brown, J. D. (1992/1993, December/January). What research questions interest TESOL members? *TESOL Matters*, p. 20.
- ・ Kamiya, N. (2016). What effect does reading academic articles on oral corrective feedback have on ESL teachers? *TESOL Journal*, 7(2), 328-349. [https://doi.org/https://doi.org/10.1002/tesj.210](https://doi.org/10.1002/tesj.210)
- ・ Pica, T. (1994). Questions from the language classroom: Research perspectives. *TESOL Quarterly*, 28(1), 49-79. <https://doi.org/10.2307/3587198>
- ・ Marsden, E., & Kasprowicz, R. (2017). Foreign language educators' exposure to research: Reported experiences, exposure via citations, and a proposal for action. *The Modern Language Journal*, 101(4), 613-642. <https://doi.org/10.1111/modl.12426>
- ・ 佐野正之 (編) (2005) .『はじめてのアクション・リサーチ—英語の授業を改善するために』大修館書店.
- ・ 吉田達弘・玉井健・横溝紳一郎・今井裕之・柳瀬陽介 (編) (2009). 『リフレクティブな英語教育をめざして—教師の語りが拓く授業研究』 ひつじ書房.
- ・ 玉井健・渡辺敦子・浅岡千利世 (2019) .『リフレクティブ・プラクティス入門』 ひつじ書房.
- ・ 一般社団法人大学英語教育学会 (JACET)・浅川和也・田地野彰・小田眞幸 (編) (2020). 『英語授業学の最前線』 ひつじ書房.
- ・ Spada, N. (2005). Conditions and challenges in developing school-based SLA research programs. *The Modern Language Journal*, 89(3), 328-338. <http://www.jstor.org/stable/3588661>
- ・ 金谷憲編 (2017). 『レッスンごとに教科書の扱いを変える TANABU Model とは』 アルク.
- ・ DeKeyser, R. M., & Botana, P. G. (2019). Doing SLA research with implications for the classroom: Reconciling methodological demands and pedagogical applicability. John Benjamins Publishing Company.
- ・ Kelly & Suzuki (2025). *The SNOOP detective school: Interactive tasks for English learners*. ABAX.
- ・ Suzuki, Y. & Nakamura, S. (in press). Pre-task Vocabulary Support Enhances Lexical Learning but Dampens

外国語教育メディア学会（LET）第 64 回（2025）年次研究大会
基調講演資料

Positive Emotions: Interactive Task Implementation in EFL Classroom. *TESOL Quarterly*.